

明日香をさぐる

古記録からみた飛鳥①

今回は江戸時代の『大和名所図会』などから、近世における野口王墓古墳周辺の様子を読み解きます。

『大和名所図会』は秋里籬島(文)、竹原春朝斎(画)により、1791(寛政3)年に京師書林と浪華書肆が発刊した名所図会です。近世以降に活発化する各地の観光地巡行の需要に応じて、京都の様子を描いた『都名所図会』を皮切りに類書が多く作られました。名所図会は各地の歴史や伝説を客観的に記し、挿絵として俯瞰図等を採用しており、いわゆる観光ガイドブック的な存在でした。

今回紹介するのは『大和名所図会』五卷(以下、「本史料」という)に描かれている「倭彦命窟、鬼窟、鬼肉几、亀石」です。ここでは現在宮内庁により欽明天皇櫓隈坂合陵の陪塚として治定されている鬼

の雪隠と鬼の俎、さらに飛鳥の謎の石造物として著名な亀石が確認でき、さらに中央に倭彦命の身狭桃花鳥坂墓と記されている大きな空洞のある小山を見ることができ

ます。まず、亀石は現在と同様に道路沿いに面して位置しており、甲羅や頭部分が表現され、亀を表現したものであることが容易にわかります。亀石については、現在南西を向いており、真西を向くと奈良盆地が泥海になるという伝説があります。本史料では一切触れていません。

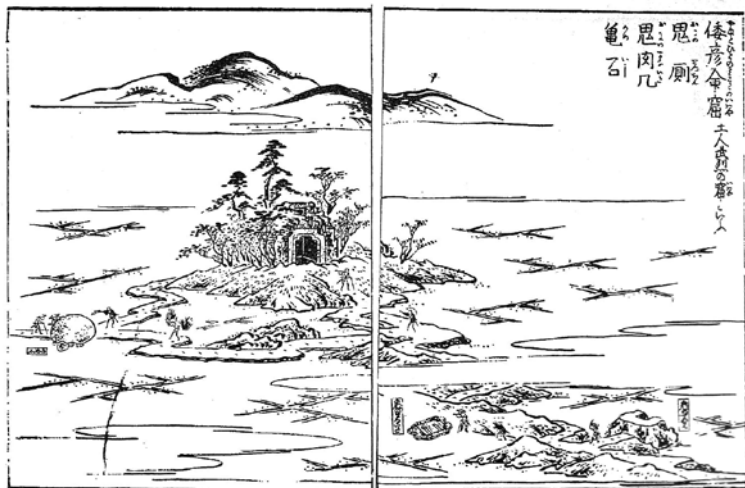
鬼の雪隠と鬼の俎についても現在と同じ位置、形状であることが確認できます。鬼の雪隠と鬼の俎

は本来、飛鳥時代に造営された古墳で、前者が横口式石槨の蓋石、後者が床石であったものが、後世のいずれかの段階で蓋石部分が崖下に転落したものとされています。本史料の本文中には「これすなはち石棺または石蓋なり。」とあり、この段階で古墳に伴う石材であることを指摘しています。また、鬼の俎には中央に手前から奥の途中までのびる二本の線も描かれています。この二本の線は現在も確認できる石材を分割しようとした際の楔跡です。細部まで丁寧に描かれていることがわかります。

さらに、本史料では倭彦命墓に関して詳細に記されていますが、その内容は『日本書紀』の記載を引用し、倭彦命薨去に際し、近習が墓周辺に生き埋めにされ、数日間朝夕呻き続けたことを天皇が悲しみ、殉死を禁止したとするものです。この場所に関する事項としてはずかしく「野口村に窟あり一丈四方なり」とあるのみです。倭彦命窟については、「土人武烈の窟といふ」とも追記されており、地元の人々は武烈天皇陵と考えていたことがわかります。1681(延

宝9)年の林宗甫による『和州旧跡幽考』や1736(享保21)年の並河誠所による『大和志』でも倭彦命の墓とする記載が見受けられます。1675(延宝3)年の『南都名所集』にも「大石の岩屋」として旅人と思われる人物がこの岩屋を覗いている様子が描かれています。(次回に続く)

(明日香村教育委員会文化財課)



『大和名所図会』巻五